

# 日本における清詩研究について — 王漁洋研究を中心に —

## Qing Poetry Studies in Japan: Focusing on the Study of Wang Yuyang

張 兵 張 月

ZHANG Bing, ZHANG Yue

【抄録】清詩は同時代の文学として江戸時代から日本に伝わり、日本の詩壇に深い影響を与えた。洋学が大々的に流入し、西洋化と近代化が積極的に求められていた明治時代においても、「清詩流行」があってまたこれが漢学の「隆盛」をもたらした。今日に至るまで、王漁洋の「神韻説」を中心とする清詩研究は長く続けられており、日本における「漢学」の重要な構成部分となっている。江戸時代より現代に至る日本における王漁洋及び清詩研究の整理、総括は、その研究水準のさらなる向上に役立つものと考えられる。

【キーワード】清詩 王漁洋 神韻説 漢学

### 一. はじめに

清詩とは中国清代の詩のことであり、中国詩史における一つ重要な時期である。特に王漁洋の神韻詩学は沈徳潜の格調詩学、袁枚の性靈詩学とともに清代三大詩学と呼ばれ、国内外において大きな影響をもたらす。

王漁洋（明崇禎7年（1634）～清康熙50年（1711））、新城（現山東省桓台县）の出身。本名士禎、雍正帝の諱（胤禛）を避けて士正とし、のち朝廷から士禎の名を賜る。字は貽上。号は阮亭、または漁洋山人。順治15年（1658）の進士で、揚州推官、礼部主客司主事、翰林院侍読などを経て刑部尚書に至る。順治14年（1657）24歳のときに詠んだ「秋柳」詩は全国に伝誦され、詩人としての名声が定まる。以後、「神韻説」を提唱し、数多くの名作を作り、康熙50年間の詩壇を主導し、「一代詩宗」と称される<sup>(1)</sup>。著作に『帶經堂集』『帶經堂詩話』『精華録』『居易録』『池北偶談』『分甘余話』『香祖筆記』などがある。

周知のとおり、日本は同じ漢字文化圏の国として、早くから「漢詩」（中国古典詩）の紹介と研究を行い、そして日本人が漢詩を読むだけでなく、自らも漢詩を作るのである（日本漢詩）。六世紀初頭に中国の漢詩文集『文選』がすでに日本に伝来し読まれている。日本現存最古の漢詩集『懷風藻』は奈良時代（710～794）中期に編纂され<sup>(2)</sup>、現存最古の和歌集『万葉集』よりも早かった<sup>(3)</sup>。その後、『凌雲新集』『文華秀麗集』『経国集』『田氏家集』『菅家文草』などに代表される平安朝（794～1185年）漢詩や、「五山文学」に代表される鎌倉（1185～1333年）・室町期（1336～1573年）の漢詩<sup>(4)</sup>、唐宋明清詩がそれぞれに鼓吹された江戸漢詩など、中国古典詩に範をとった日本漢詩の実作は、日本

の文学史において大きな比重を占めてきた。さらに、中国古典詩は、単に日本漢詩文の世界にとどまらず、広く和文系国文学の世界にも影響を与えてきたと言われる<sup>(5)</sup>。

松浦友久編著『漢詩の事典』によると、三千年を超える中国の「漢詩」の歴史を以下のように三つの時期に大別することができるという。第一期は、先秦時代から漢末ごろまでの「古代詩歌」であり、作者不明な『詩経』『古謡諺』系の作品と、屈原や宋玉などの作者が想定されている『楚辞』（辞賦）系の作品とに大別される。第二期は、魏晋南北朝から唐末ごろまでの「中世詩歌」であり、特に中国を代表する詩人が輩出し、同時に中国古典詩の韻律と詩型が完成した唐朝時代は注目に値するとされる。以後、近世から近現代の中国はもちろん、日本や韓国朝鮮、ヴェトナムなどにおいても、「漢詩」は基本的にすべて、唐詩の韻律と詩型に従って作られているのであると見られる。第三期は、宋元時代から近現代までの「近世・近現代詩歌」であり、それは韻律と詩型の面では唐詩の基準に依拠しながら、発想から題材の面では、それぞれの時代や社会を反映した変化や展開を示している。特に明代と清代では詩歌の実作や研究が理論化され、詩境に関わる理念や美意識が詩派、詩流として競合するという傾向が著しい。明代の李攀龍、袁宏道、鍾惺、清代の王士禛（王漁洋）、沈德潜、袁枚などは、いずれもその典型である<sup>(6)</sup>。

上述した理由により、日本における漢詩の紹介も漢詩に関する研究も唐詩が中心となっているが、王漁洋を含めた清代詩人の詩作と詩論についても注目が集まり、数多くの研究がなされている。本稿では、王漁洋研究を中心に、まだ整理されてこなかった日本における清詩研究の歴史と現状を時系列で考察し、あわせてその今後の展望について言及する。

## 二．日本における清詩研究の展開と成果

### 1. 江戸時代（1603～1868年）

清詩は早くも江戸時代から日本に多く流入してきた。これは、江戸時代から清詩が日本で盛んに出版されることからわかる。おおよそ江戸中期から、同時代の文学として、清詩の総集及び別集の和刻本が刊行され、王漁洋の神韻詩学、沈德潜の格調詩学、袁枚の性靈詩学は当時大いに注目され、後に日本詩壇に大きく影響する清代三大詩学であった<sup>(7)</sup>。表1は江戸時代に和刻本として出版された清詩総集と王漁洋詩別集をまとめたものである。清詩総集として、梁川星巖編『清六大家絶句抄』は王漁洋、朱彝尊、吳偉業、袁枚、吳錫麟、沈德潜といった清「六大家」の詩作を幅広く収録し、そのうち王漁洋詩565首で最多となっている。王漁洋詩別集としては、韓珏（山口凹巷）編『王阮亭詩選』と相馬肇編『王漁洋詩抄』、梁川星巖編『漁洋絶句抄』はともに王漁洋著、金栄校の『漁洋山人精華録箋注』を元になっているが、詩選の視点が異なり、それぞれ特徴があると言える<sup>(8)</sup>。

江戸時代和刻本の多くは、後では稀覯書となり、見るのがなかなか難しいことから、新しく整理し出版する動きが出ている。例えば、汲古書院から出版された長澤規矩也編『和刻本漢詩集成総集編』（汲古書院1982年2月）は、唐から清まで各朝詩の主な和刻本総集を収録し、全書は十巻からなり、うち第八巻は次の六つの清詩総集和刻本が含まれている。①『古今詩刪（上）』（李攀龍編、徐中行校、寛保3年（1743）刊）、②『清詩選選』（孫鉉編、宝暦5年（1755）刊）、③『七詩詩選』（沈德潜編、宝暦7年（1757）刊）、④『清詩選』（奥田元継選、享和3年（1803）刊）、⑤『国朝四大家詩』（屠德修等編、文政2年（1819）刊）、⑥『隨園女弟子詩選選』（袁枚編、文政13年（1830）刊）。

表 1 江戸時代和刻本清詩総集及び王漁洋詩別集、単行刻本

清詩総集 (順序, 編者及び書名, 刊刻者, 刊刻時間、備考)
1, 孫欽韓評, 黄朱芾編校『清詩選』二卷, 著屋勘兵衛, 宝暦 4 年 (1754)
2, 孫欽撰, 坂倉通貫輯, 片岡正英校『清詩選選』十卷, 有馬屋莊橋刊, 宝暦 5 年 (1755)
3, 沈德潜編『七詩詩選』, 宝暦 7 年 (1757)
4, 奥田元繼選, 高岡公恭輯『清詩選』七卷, 享和 3 年 (1803)
5, 村瀬斐編『清百家絶句』, 文化 12 年 (1815)
6, 宮澤達編『国朝四大家詩』, 文政 2 年 (1819) (施愚山, 宋荔裳, 王漁洋, 朱竹垞)
7, 荒井公廉編『清詩別裁選』, 文政 6 年 (1823)
8, 苓陽先生, 中野成規編『清詩漫抄』, 天保 11 年 (1840)
9, 服部孝編『清十家絶句』, 嘉永 5 年 (1852) (銭牧齋, 吳梅村, 王漁洋, 朱彝尊, 查初白, 黄莘田, 王夢楼, 袁簡齋, 蔣藏園, 趙甌北)
10, 梁川星巖編『清六大家絶句抄』, 河内屋茂兵衛ほか 10 名, 嘉永 6 年 (1853) (王士禎漁洋絶句抄 4 卷, 朱彝尊竹垞絶句抄 1 卷, 吳偉業吳梅村絶句抄 5 卷, 袁枚隨園絶句抄 11 卷, 吳錫麒有正味齋絶句抄 2 卷, 沈歸愚沈德潜絶句抄 3 卷)
11, 大江維綱編『金元清詩類選』八卷, 安政 3 年 (1856)
12, 『昌平齋寫本』, 江戸後期 (年次不詳) (王士禎撰漁洋詩集抄, 趙懷玉撰亦有生齋集, 章藻功思綺堂文集)
王漁洋詩別集 (順序, 編者及び書名, 刊刻時間)
1, 韓珏 (山口凹巷) 編『王阮亭詩選』六卷, 文化 10 年 (1813)
2, 相馬肇編『王漁洋詩抄』, 弘化 3 年 (1846)
3, 王士禎撰『漁洋詩抄』卷上, 嘉永 3 年 (1850)
4, 梁川星巖編『漁洋絶句抄』, 嘉永 5 年 (1852)
単行刻本 (順序, 編者及び書名, 刊行時間)
1, 王漁洋撰『漁洋山人精華録』, 享保 11 年 (1726)
2, 王漁洋撰『帶經堂集』, 寛政 6 年 (1794)
3, 王漁洋撰『帶經堂全集』, 天保 12 年 (1841)
4, 王漁洋撰『王漁洋全集』, 弘化 4 年 (1847)

出典：国立国会図書館資料より作成。

同じく汲古書院から出版された長澤規矩也編『和刻本漢詩集成』(汲古書院 1987 年 12 月)は唐代から清代詩人の主な和刻本別集を収録している。全書は 20 巻からなり、うち第 20 巻は次のような構成となっている。王漁洋撰王阮亭詩選(山本珏編)、翁長祚撰花曆百詠(大窪行等編)、查慎行敬業堂詩抄(嘉永二年刊)、蔣士銓撰忠雅堂詩抄(平井翰編)、袁枚撰隨園詩抄(市河世寧編)、袁枚撰隨園絶句抄(上田元冲校)、王文治撰王夢楼絶句(穴戸逸郎編)、趙翼撰甌北詩選(確井欽編)、張問陶撰船山詩草(上野圭庵編)、蔡雲撰蔡雲吳兪欠抄(大森欽編)、陳文述撰陳碧城絶句(櫻井監編)、陳鴻誥撰味梅華館詩抄(原田隆編)。

汲古書院から出版されたこの二つは名実ともに江戸時代から残された各種の漢詩和刻本の集大成であり、なかの多くは個人や図書館に収蔵されている珍本である。その刊行は関連研究にたいへん便利を与えただけでなく、和刻本の保存と伝承との視点から見ても有意義なことであろう。

## 2. 明治時代 (1868 ~ 1912 年)

明治時代に入ると、洋学の流入によって衰退するかに思われた日本の漢詩文が量的にも質的にも「空前絶後の隆盛」特に「清詩流行」と呼ばれる清詩の大々的な流行が現れた<sup>(9)</sup>。明治時代の詩人、評論家大町桂月がこれを「明治文壇の奇現象」と呼び、次のように述べている。「西洋の文物文芸どしどし輸入せられて、行燈は洋燈と代る世の中に、その行燈の燈火減せむとして暫く明かなりとは、今の漢詩壇の謂か。明治二十年代は実に漢詩全盛時

代なりき」<sup>(10)</sup>。つまり、西洋化・近代化の道 را走り始めた明治時代、西洋の文学や思想がさかんに輸入され、新しい小説、新しい詩が勃興するに伴って衰退するかに思われた伝統的な漢詩が却って盛んになったこと、その事実が、同時代の文人の眼にすら「奇現象」と映ったことがみてとれる<sup>(11)</sup>。

また、江戸末期から明治・大正にいたる漢詩壇を論じる上で、もう一つ重要なのが清詩の流行である。それは、唐宋の詩人たちの作品を読み、さらに清人の詩も読む、といったものではなく、李白や杜甫、韓愈、白居易などはおいて何よりもまず清人の詩にむかう、といった状況であった。例えば明治の漢詩人野口寧齋は、清人の詩集を収集して「清詩万巻楼」と名づけたうえ、自らの主宰する雑誌『百花欄』にその書目を連載して当時の人々の羨望を集めたという<sup>(12)</sup>。近藤元粹は『評註浙西六家詩抄』（嵩山堂 1903 年）の序文の中でこう述べている。

「わが国の詩学が大いに盛行するなかで、世の多くが清詩を好み、これを“新調”といって誇っている。…いまの人はひたすら清詩を学ぶばかりで、清の詩人たちが学んだ（過去の詩人たちの作品）を学ぼうとはしないのだ」<sup>(13)</sup>。

この一文からも、この時期、清詩がひとつの流行としていかにもてはやされたかを読み取ることができるだろう。なお、この時期に熱心に読まれた清朝の詩人として王漁洋など清朝初期に属する詩人が特に挙げられるが、その後陳文述や張問陶など明治の漢詩人たちにとってほぼ同時代の清詩人も挙げられる。要するに、王漁洋をはじめとする清人の詩が、ほぼ同時代である日本の明治時代には、熱心に読まれ、学ばれ、研究されたのであり、またその風潮がその後にも影響を及ぼし、後人に継承されたのである。いわば、明治時代における「漢詩の隆盛」、「清詩流行」と伴って、日本における清詩に関する関心と研究は一気に高まってきたと言える。

なぜこのような現象があったのか。既存研究では以下のように解釈されている。①木下彪『明治詩話』によれば、「江戸時代から士大夫の文学に対して、庶民の文学即ち稗史小説浄瑠璃俳諧狂歌川柳などが発達して来たが、寛政以後漢文が庶民階級にまで普及すると共に、庶民文学の影響を受けて平易化し遊戯化した漢詩文が、写实的傾向を以て現実生活に結びつき、広く士民一般の間に流行した」という<sup>(14)</sup>。②大江敬香「明治詩壇評論」は「清廿四家詩、清三家絶句最も世に行わる清詩の江湖に伝播する実に春濤の力なり」と言い、このような清詩流行に中心的役割を果たしたのが森春濤であると見ている<sup>(15)</sup>。水津有理（2007）は「明治時代の漢詩の流行が、江戸時代からとぎれなく続いて来たものというよりは、いったん「社会より遺忘せられ」たのち、森春濤による清詩の鼓吹によって再び何か「新しいもの」として息を吹き返したのではないか、と思わせるものがある」と指摘し、同じく森春濤による力が大きかったとしている。

明治時代の和刻本の中に特に注目に値するのは中島一男編『清廿四家詩』である。この本は森春濤をはじめとする日本漢学者から選出された 24 人の清代詩人の作品集であり、当時の日本漢学界による清代詩人についての認識と位置付けを反映するものとして見てよいと考えられる。言い換えれば、『清廿四家詩』は当時日本漢学界の総力を挙げて清詩名家について権威のある整理と評定を行ったのである。



表2 明治時代和刻本清詩総集、王漁洋詩專選本その他

<b>清詩総集</b> (順序, 編者及び書名, 刊刻者, 刊刻年月, 備考)
1, 中島一男編『清廿四家詩』(巻上, 巻中, 巻下), 万巻堂, 明治11年(1878)10月 (巻上: 銭牧齋, 呉梅邨, 宋荔裳, 施愚山, 王漁洋 巻中: 陳迦陵, 黄莘田, 查初白, 厲樊榭, 嚴海珊, 趙秋谷, 尤西堂, 朱竹垞 巻下: 蔣藏園, 王夢樓, 趙甌北, 吳穀人, 吳澹川, 張船山, 陳碧城, 郭頻伽, 袁簡齋, 錢籀石, 王穀原)
2, 土屋栄抄『清詩佳絶』三巻, 晴靄山房, 明治12年(1879)
3, 渡辺頌也編『明清名家文雑抄』, 豊住伊兵衛, 明治15年(1882)3月(王士禎)
4, 沈徳潜撰『清詩別裁選』二版, 荒井公廉編, 赤志忠雅堂, 明治15年(1882)8月
5, 土屋栄輯『清百家絶句』, 文永堂, 明治15年(1882)10月
6, 藤田軌達編『高等漢文例題』, 大阪書房, 明治26年(1893)11月
7, 近藤元粹編『評注浙西六家詩抄』, 嵩山堂, 明治36年(1903)(厲樊榭, 嚴海珊, 王穀原, 錢籀石, 袁簡齋, 吳穀人)
8, 菊池晩香編『漢試関鍵』, 早稲田大学出版部, 明治37年(1904)9月(王漁洋集)
<b>王漁洋別集</b> (順序, 編者及び書名, 刊刻者, 刊刻年月)
1, 柳政愬録『漁洋山人精華録絶句抄』, 浪華文会, 明治19年(1886)4月
2, 柳三舟編『漁洋精華録絶句抄』, 明治19年(1886)
<b>単行刻本</b> (順序, 編者及び書名, 刊刻者, 刊刻年月)
1, 王士禎撰『唐賢詩集箋注』, 翰墨園, 明治16年(1883)
2, 王漁洋撰『漁洋山人自撰年譜巻上・下』, 恵棟注補, 徐氏述史樓, 明治24年(1891)
3, 王士禎編『唐賢詩集: 箋注』 吳煊, 胡棠注, 近藤元粹評, 青木嵩山堂, 明治31年(1898)12月
4, 王士禎著『広唐賢三昧集』, 文昭補録, 七条愷編, 西東書房, 明治43年(1910)3月
<b>研究著作</b> (順序, 著者及び書名, 出版社, 出版年月, 備考)
1, 田岡嶺雲『支那文学大綱巻十三 王漁洋』, 大日本図書, 明治33年(1900)
2, 桂五十郎, 鈴木虎雄『評釈支那詩史』, 早稲田大学出版部, 明治40年(1907)(王士禎)
3, 桂五十郎『歴代漢詩評釈』, 早稲田大学出版部, 明治43年(1910)9月
4, 児島献吉郎『支那文学史綱』, 富山房, 明治45年(1912)7月(第六章王士禎と神韻派)
5, 児島献吉郎『支那文学史』, 早稲田大学出版部, (出版年不詳)(第五章王士禎)

出典: 国立国会図書館資料より作成。

江戸時代と変わったのは、清詩総集及び王漁洋など清詩人別集の和刻本以外に、明治時代では関連する研究が多くあり、清詩や王漁洋を含めて、中国詩史と中国文学史について総合的に解説し分析している。ここではその一例として田岡嶺雲著『中国文学大綱巻十三 王漁洋』を挙げてみる。

大型叢書『支那文学大綱』15巻は明治日本における西学の強盛に消極的な学者たちが東洋文化への敬意に基づき、「世界文学としての中国古典の再生」を志して発刊したものである。田岡嶺雲、白河鯉洋、笹川臨風、藤田剣峰、大町桂月など著名な学者が執筆を担い、1897年から1904年の間に15巻を完成し、研究対象として中国歴代の著名な文学家を取り上げている。田岡嶺雲は「莊子」「屈原」「蘇東坡」「高青邱」「王漁洋」といった五つの評伝を執筆し、巻十三王漁洋はその一つである<sup>(16)</sup>。『支那文学大綱巻十三 王漁洋』は以下の五章からなっている。つまり第一章康熙の世、第二章漁洋の生涯、第三章清初の詩、第四章清初の詩人、第五章漁洋の詩及詩論であり、清初の時代的背景及び清初の詩、王漁洋の生涯、王漁洋の詩と詩論について解説と評価を行っている。この本が出版されたら、直ちに大きな関心と議論を引き起こし、『読売新聞』において読者からの質疑等と作者による返答が繰り返して行われた。なお、法政大学出版局から2018年に出版された『田岡嶺雲全集第六巻』は田岡嶺雲のこれら五つの評伝を収録し、全ての評伝の後に新しく注解を付け、また田岡嶺雲から1911年以降発表された関連評論や感想などもあわせて収録している。田岡嶺雲の王漁洋評伝はこうして百年後に斬新な面目であらためて出版されたことは、一つの側面から日本における清詩研究は長く続いており、絶えずに発展している

ことを示している<sup>(17)</sup>。

3. 大正時代（1912～1926年）と昭和時代前期（1926～1945年）

大正時代と昭和時代前期には、戦乱や社会不安が続き、研究環境は大きな影響を受けた。しかし、清詩と王漁洋の研究は継続的に行われ、多くの成果が出ている。また、明治期に続いて和刻本が減少し、研究書が増加してきている。つまり、日本漢学界における清詩と王漁洋にかかわる動きは紹介から研究へとスタイルが転換している。

1940年に出版された鈴木虎雄の『支那詩論史』は同時期の清詩及び王漁洋研究の中で最も注目すべき成果であると考えている<sup>(18)</sup>。同書は先秦から魏晉南北朝までの中国詩論史を概括した上で、「格調」「神韻」「性霊」といった三大詩説について紹介比較し、特に王漁洋の神韻説についてその源流、詩論、詩作、特徴、他人の評価など様々な面から詳しく解説し分析している。なかでは、神韻説の特質として、「時に関しては春、若しくは秋。而して春よりも秋、夏よりは冬によろし。昼よりは夜。晴よりは雨。暖よりは寒。一日のうちにては日の真盛りよりは朝暮をよしとす」と述べ、また、「凡て程度の高からざるを貴ぶ。…濃厚よりは淡泊なるを貴ぶ。諸事につけ消極的なり。…漁洋が『微』字を愛するは此意なるべし。『澹』の字の意は則ち程度はげしからぬ、あっさりとしたる処を賞美するにあるべし」などと述べ、簡潔でありながら的確にまとめている。

表3 大正時代と昭和前期清詩及び王漁洋研究文献

清詩総集(順序、編者及び書名、刊行者、刊行時間、備考)
1, 釈清潭『狐禅狸詩』(大正文庫第六編), 丙午出版社, 大正2年(1913)(王漁洋及袁隨園詩収録)
2, 結城蕃堂編, 国分青厓校閲『和漢名詩鈔』, 文会堂書店, 大正4年(1915)
3, 磯野於菟介編『碧雲仙館藏清詩』第二集, 大正14年(1925)
4, 立命館大学『作詩参考書』第一編, 昭和4年(1929)(第三節王漁洋寒山夜雨の詩)
5, 声教社同人編『清詩詳解』, 声教社, 昭和8年(1933)
6, 今関天彭『燕山草堂説詩』第一編, 今関寿麿, 昭和9年(1934)(王漁洋)
7, 近重真澄『和漢古今詩變管窺』, 近重先生古稀祝賀会, 昭和15年(1940)
王漁洋詩別集(順序、編者及び書名、刊行者、刊行時間)
1, 辻市治郎編『詳解漁洋百絶』二卷, 雅声社, 昭和四年(1929)
研究著作(順序、著者及び書名、出版社、出版時間、備考)
1, 今関天彭『清代及現代の詩文界』, 今関研究室, 大正14年(1925)(王士禎(漁洋))
2, 高須芳次郎『東洋文芸十六講』, 新潮社, 大正15年(1926)(神韻派の驍將王士禎と性霊派の翹楚袁枚)
3, 山本悌二郎, 紀成虎一『宋元明清書画名賢詳伝卷十一 王漁洋 士禎』, 丙午出版社, 昭和2年(1927)
4, 今関天彭『近代支那の学芸』, 民友社, 昭和6年(1931)(王士禎(漁洋))
5, 三省堂「王漁洋小像」, 『書苑』1巻10号, 昭和12年(1937)12月
6, 三省堂『書苑』1巻1号, 昭和12年(1937)3月(清王士禎詩稿幅-孫伯醇氏所藏)
7, 鈴木虎雄『支那詩論史』(支那学叢書第一編), 弘文堂, 昭和15年(1940) (第四章 神韻の説を論ず 一. 清詩に於ける王漁洋/179 二. 漁洋と天才、家学、郷土、師友/179 三. 漁洋の神韻説由来/183 四. 詩境と禅境/184 五. 詩趣と画趣/186 六. 神韻ある詩の例/188 七. 漁洋、五言の趣味を七言に応用す/194 八. 漁洋以前の源流/194 九. 七言句神韻の例/197 十. 漁洋と五七言絶句/198 十一. 古詩と神韻/199 十二. 神韻説に対する臆解/200 十三. 漁洋と古詩の声調の説/207)
8, 李維著, 真田但馬訳註『支那詩史』, 大東出版社, 昭和18年(1943)(清詩の衰微と旧体詩の終局)

出典：国立国会図書館資料より作成。

#### 4. 昭和時代後期（1946～1989年）とその後

戦後、特に1980年代以降、日本経済は繁栄し、社会は安定し、学術研究に良好な条件と環境を提供し、清詩研究は量と質の両面で大発展期に入った。筆者が収集した戦後日本の清詩及び王漁洋に関する研究成果を著書、論文、訳注別に表4、表5、表6に列挙する。収集には漏れがあるが、戦後から現在までの漢学界における清詩及び王漁洋に関する研究の主な成果が含まれている。

大まかにいえば、専門書は次の四つに分けることができる。①中国文学、詩の総集と総論、その中に清代文学、清詩及び王漁洋詩が含まれる。②王漁洋の詩を含む清代の文学、詩の総集と総論。③王漁洋詩及び王漁洋研究。④文学、詩辞典または事典、中に清詩と王漁洋が収録されている。論文と訳注は主に王漁洋の詩作、詩論の研究及び王漁洋の詩を含んだ日本における清詩の伝来と受容に関する研究をメインにしている。

この時期の清詩と王漁洋研究の大作としては、前者は青木正児の『清代文学評論史』（岩波書店1950年）が挙げられ、後者は高橋和巳の『王士禛』（岩波書店1962年）と橋本循の『王漁洋』（集英社1965年）が代表的である。青木正児の『清代文学評論史』は人物を主線として清詩について本格的に論じ、第三章神韻説の提唱と宋元詩の流行は王漁洋の詩論に関する研究である<sup>(19)</sup>。高橋和巳の『王士禛』は岩波書店から出版された中国詩人選集シリーズの中に一つであり、王漁洋詩89首を選んで注解と分析を行い、また年譜の形で王漁洋の生涯を紹介している<sup>(20)</sup>。橋本循の『王漁洋』は集英社から出版された漢詩大系24巻のうち23巻目で、2020年には法蔵館によって『橋本循著作第三巻 王漁洋』として改訂重版され、王漁洋小伝、王漁洋詩（216首）、王漁洋詩論の三つの部分を含んで、内容は詳しく、日本における王漁洋研究の重要な著作の一つと言える<sup>(21)</sup>。

表4 昭和後期以降清詩及び王漁洋研究文献：著書

- |   |
|---|
| 1, 近藤春雄『中国文人の芸術』, 大雅堂, 1946年(第五節王漁洋の論詩絶句)   |
| 2, 青木正児『清代文学評論史』, 岩波書店, 1950年(第三章神韻説の提唱と宋元詩の流行 一. 王士禛(漁洋)の神韻説 二. 王漁洋と宋元詩 三. 王漁洋及び趙執信(秋谷)の声調説)                       |
| 3, 安岡正篤選訳, 吉村岳城筆録, 伊藤長四郎抄編『名詩選釈』, 明德出版社, 1955年(悼亡・王漁洋)  |
| 4, 内田泉之助『新釈和漢字名詩選』, 明治書院, 1958年(清詩)   |
| 5, 中国古典詩同好会『中国古典詩』, 1961年12月(「王漁洋の詩」)   |
| 6, 高橋和巳『中国詩人選集二集13 王士禛』(王士禛詩, 王士禛年譜), 岩波書店, 1962年   |
| 7, 加地哲定『中国仏教文学研究(中国叢書第一巻)』, 高野山大学文学部中国哲学研究室, 1965年(王漁洋の詩説)  |
| 8, 橋本循『漢詩大系23 王漁洋』, 集英社, 1965年(王漁洋小伝, 揚州以前の作, 揚州の作とその後の作, 四川旅行の作とその後の作, 南海旅行の作とその後の作, 陝西・四川旅行の作と晩年の作, 漁洋の詩論, 王漁洋年譜) |
| 9, 和田利男『中国名詩鑑賞のすすめ: 陶淵明より査慎行まで』, 愛育出版, 1966年(王士禛)   |
| 10, 近藤光男『清詩選』, 集英社, 1967年   |
| 11, 前野直彬編訳『中国古典文学大系十九巻 宋・元・明・清詩集』, 平凡社, 1973年3月   |
| 12, 近藤光男『清詩選』四版(漢詩大系第二十二巻), 集英社, 1975年  |
| 13, 日本詩吟学院岳風会編『吟詠教本 漢詩篇』, 笠間書院, 1976年   |
| 14, 村山古廣編『清詩』, 明治書院, 1976年4月  |
| 15, 山田勝美『中国名詩鑑賞辞典』, 角川書店, 1978年7月   |
| 16, 松下忠『明・清の三詩説』, 明治書院, 1978年12月(李攀竜・王世貞の格調説, 袁宏道・袁枚の性霊説, 王士禛の神韻説)  |
| 17, 長澤規矩也編『和刻本漢詩集成総集篇(8)』, 汲古書院, 1982年2月  |
| 18, 榊原綿逸『詩吟道大鑑』, 金園社, 1981年12月(王士禛)   |
| 19, 森槐南『中国詩学概説』, 臨川書店, 1982年12月   |
| 20, 神田喜一郎『明治漢詩文集』, 筑摩書房, 1983年  |

- 21, 近藤春男『日本漢学大辞典』, 明治書院, 1985年
- 22, 松枝茂夫編『中国名詩選』, 岩波書店, 1986年10月
- 23, 伊藤虎丸, 横山伊勢雄編『中国の文学論』, 汲古書院, 1987年9月(吉原英夫「王漁洋と沈徳潜」)
- 24, 長澤規矩也編『和刻本漢詩集成(20)』, 汲古書院, 1987年12月(王漁洋撰王阮亭詩選, その他)
- 25, 松村昂『清詩総集 131 種解題』, 中国文芸研究会, 1989年12月
- 26, 近藤春男「王士禎」『新潮世界文学辞典』, 新潮社, 1990年
- 27, 川瀬一馬編著『お茶の水図書館蔵新修成實堂文庫善本書目』, 石川文化事業財団, 1992年10月(王漁洋詩抄)
- 28, 村山吉広『中国の名詩鑑賞十: 清詩』, 明治書院, 1993年6月
- 29, 集英社「王士禎」『世界文学大事典』, 集英社, 1996年
- 30, 近藤光男『清詩選(漢詩選: 14)』, 集英社, 1997年3月
- 31, 林田芳園編『墨場必携清詩選』, 二玄社, 1997年11月
- 32, 松浦友久ほか「王士禎」『漢詩事典』, 大修館書店, 1999年
- 33, 松浦友久編著『唐詩解釈辞典: 校注・続』, 大修館書店, 2001年4月
- 34, 日外アソシエーツ編『中国古典文学案内』, 日外アソシエーツ, 2004年3月
- 35, 宇野直人『漢詩の歴史: 古代歌謡から清末革命詩まで』, 東方書店, 2005年12月(第十四章清詩 清代初期一遺民詩人から王士禎まで)
- 36, 福本雅一『書林と詩苑 其五』, 藝文書院, 2005年12月
- 37, 相島宏『中国詩詞翻訳索引 清代』, 国立国会図書館, 2005年
- 38, 竹内実編著『岩波漢詩紀行辞典』, 岩波書店, 2006年5月
- 39, 橋川時雄『橋川時雄の詩文と追憶』, 汲古書院, 2006年6月(橋本博士の『王漁洋』に思う)
- 40, 福本雅一『読書の詩』, アートライフ社, 2006年10月
- 41, 新田大作監修『吟詠教本 漢詩篇』改訂2版, 日本詩吟学院岳風会, 2006年12月
- 42, 周勳初著, 高津孝訳『中国古典文学批評史』, 勉誠出版, 2007年7月(王士禎の神韻説)
- 43, 鈴木洋保, 弓野隆之, 菅野智明編『中国書人名鑑』, 二玄社, 2007年10月(王士禎)
- 44, 川合康三監修『中国文学研究文献要覧: 古典文学』, 日外アソシエーツ, 2008年7月
- 45, 松村昂『明清詩文論考』, 汲古書院, 2008年11月
- 46, 伊藤漱平『伊藤漱平著作集』第四卷(中國近世文学編), 汲古書院, 2009年12月(王漁洋と山左詩人)
- 47, 日本放送出版協会編『NHK 新漢詩紀行友愛深厚篇』, 日本放送出版協会, 2009年4月(王士禎余話)
- 48, 猪口篤志『中国歴代漢詩選』, 右文書院, 2009年7月
- 49, 渡部英喜『こころにとどく漢詩百人一首』, 亜紀書房, 2010年4月
- 50, 石川忠久監修『NHK 新漢詩紀行ガイド1』, 日本放送出版協会, 2010年4月
- 51, 雲英末雄編『江戸書物の世界: 雲英文庫を中心にたどる』, 笠間書院, 2010年10月(合山林太郎「『漁洋山人精華録訓纂』への自筆書入れ翻刻」)
- 52, 宇野直人『漢詩をよむ: 漢詩の来た道(宋代後期・元・明・清・近代)』, 日本放送出版協会, 2010年10月
- 53, 石川忠久監修『漢詩: 中国語朗読&日本語朗読(下)(唐・杜甫〜近現代)』, アブライ, 2010年11月
- 54, 松村昂『清詩総集叙録』, 汲古書院, 2010年11月
- 55, 井波律子『中国名詩集』, 岩波書店, 2010年12月
- 56, 林田慎之助『漢詩を味わう』, 日本経済新聞出版社, 2011年3月
- 57, 簡野道明原著, 田口暢穂編著『漢詩の名作集』(上), 明治書院, 2011年4月
- 58, 宇野直人, 江原正士『漢詩を読む4(陸游から魯迅へ)』, 平凡社, 2012年1月
- 59, 日野俊彦『森春濤の基礎研究』, 汲古書院, 2013年2月(森春濤と清詩)
- 60, 合山林太郎『幕末・明治期日本漢詩文之研究』, 和泉書院, 2014年
- 61, 川合康三編訳『新編中国名詩選』, 岩波書店, 2015年3月(秋柳四首, 秦淮雜詩十四首, 潼川懷少陵)
- 62, 植木久行編著『中国詩跡事典: 漢詩の歌枕』, 研文出版, 2015年3月
- 63, 今関天彭著, 揖斐高編『江戸詩人評伝集』, 平凡社, 2015年11月(明清詩風の影響)
- 64, NHK サービスセンター『漢詩をよむ中国のこころのうた』第8巻(明・清の詩人)(王士禎), 2015年
- 65, 宇野直人『漢詩名作集成: 中華編』, 明德出版社, 2016年3月
- 66, 田岡嶺雲著, 西田勝編『田岡嶺雲全集第六巻』, 法政大学出版局, 2018年1月(「王漁洋評伝」)
- 67, 瀧口房州撰『清詩百人一首』, 三省堂書店, 2020年2月(王漁洋)
- 68, 橋本循著橋本循記念会編『橋本循著作集第三巻 王漁洋』, 法藏館, 2020年3月
- 69, 竹村則行『中国文学論纂』, 花書院, 2021年11月(第六章清朝文学史研究)
- 70, 宇野直人『唐宋詩詞叢考』, 研文出版, 2022年3月(王士禎「秋柳」詩の重層的発想について)
- 71, 直井文子『日本漢文学の江戸後期: 知識人の自己表現』, 汲古書院, 2023年4月(江戸後期の日本漢詩文壇)
- 72, 『明清文学論集』編集委員会編『明清文学論集: その楽しさその広がり』, 東方書店, 2024年3月

出典: 国立国会図書館資料より作成。



表5 昭和後期以降清詩及び王漁洋研究文献：論文

- 1, 橋本循「揚州に於ける王漁洋」, 立命館大学『立命館文学』245号, 1965年11月, 第45-65頁
- 2, 佐藤一郎「王漁洋与清朝風」, 集英社『漢詩大系 23 王漁洋』, 1965年12月
- 3, 中田勇次郎「唐詩及び王漁洋」, 集英社『漢詩大系 23 王漁洋』, 1965年12月
- 4, 田中倫橋「王漁洋の詩の軌跡—青年時代の詩心の座標(二)」, 『姫路学院女子短期大学紀要』9号, 1982年1月
- 5, 田中倫橋「王漁洋の詩の軌跡—青年時代の詩心の座標(三)」, 『姫路学院女子短期大学紀要』10号, 1983年3月
- 6, 品川理恵子「王漁洋の作詩における神韻への意識: 蜀道集と雍益集を対比して」, 『お茶の水女子大学中国文学会報』Vol. 2, 1983年4月, 第31-47頁
- 7, 田中倫橋「王漁洋の詩の軌跡—青年時代の詩心の座標(四)」, 『姫路学院女子短期大学紀要』12号, 1984年12月
- 8, 田中倫橋「王漁洋の詩の軌跡—青年時代の詩心の座標(五)」, 『姫路学院女子短期大学紀要』13号, 1985年12月
- 9, 田中倫橋「王漁洋の詩の軌跡—青年時代の詩心の座標(六)」, 『姫路学院女子短期大学紀要』14号, 1986年12月
- 10, 船津富彦「王漁洋の小説論」, 東洋大学文学部紀要『東洋学論叢』11号, 1986年3月, 第1-14頁
- 11, 大平桂一「揚州時代の王漁洋—汪懋麟の作品を手がかりとして」, 日本中国学会『日本中国学会報』38号, 1986年, 第202-216頁
- 12, 竹村則行「論詩絶句にあらわれた王士禛の明代文学批評」, 中国古典学会『中国古典研究』31号, 1986年12月, 第33-47頁
- 13, 大平桂一「王漁洋の古詩平仄論—七言古詩を中心として」, 東方学会『東方学』73号, 1987年1月, 第140-155頁
- 14, 神田喜一郎「日本における清詩の流行」, 『神田喜一郎全集』第八卷, 同朋舎出版, 1987年
- 15, 岡田祥子「王漁洋の『唐賢三昧集』について」, 『お茶の水女子大学中国文学会報』Vol. 6, 1987年4月, 第137-145頁
- 16, 馬曉地「論王漁洋『秋柳』詩之朦朧美」, 京都大学『中国文学報』38号, 1987年10月, 第115-125頁
- 17, 大平桂一「王漁洋詩論」, 『大阪女子大学人文学科日本語日本文学専攻紀要』39号, 1988年3月, 第63-79頁
- 18, 大平桂一「神韻説再考(上)」, 『大阪女子大学人文学科日本語日本文学専攻紀要』40号, 1989年3月, 第108-122
- 19, 大平桂一「神韻説再考(下)」, 『大阪女子大学人文学科日本語日本文学専攻紀要』42号, 1991年3月, 第1-20頁
- 20, 三枝茂人「王漁洋の「悼亡詩三十五首」について」, 『名古屋外国語大学紀要』, 1991年第4号
- 21, 揖斐高「明治漢詩の出發—森春濤試論」, 『江戸文学』第21号, 1992年12月
- 22, 宮内保「山水描写の手法—王漁洋「神韻詩」の場合」, 日本中国学会『日本中国学会報』44号, 1992年, 第202-217頁
- 23, 巖明「從王士禛到袁枚—論清代康・乾時期的詩風轉變」, 神奈川大学『人文研究』124号, 1995年9月, 第35-62頁
- 24, 范建明「沈德潜詩学研究」, 日本大学博士論文, 1996年3月25日(第八章沈德潜と王士禛)
- 25, 中村嘉弘「王漁洋の神韻説について」, 『國學院雜誌』97号, 1996年11月, 第170-184頁
- 26, 門田真知子「欧米における中国詩の伝播の実態の比較研究」, 鳥取大学『文部省科学研究費補助金研究成果報告書』, 1996-1997年
- 27, 鷺野正明「王漁洋の「古澹」詩説について」, 日本中国学会『日本中国学会創立五十年記念論文集』, 汲古書院, 1998年10月
- 28, 福井辰彦「明治漢詩と王士禛—『新文詩』所収作品から」, 京都大学『国語国文』第861号, 2006年5月
- 29, 辰巳正明「国学における和歌論と明清詩学」, 『國學院雜誌』107巻11号, 2006年11月, 第1-11頁
- 30, 水津有理「明治期における清詩受容について—同時代の文学として」, 『お茶の水女子大学教育研究成果集』, 2007年3月, 第286-289頁
- 31, 荒井礼「王漁洋の「悼亡詩三十五首」について」, 『国士館大学漢学紀要』10号, 2007年10月, 第15-41頁
- 32, 荒井礼「王漁洋の「詠史小楽府三十首」について」, 筑波大学『筑波中国文化論叢』27号, 2007年, 第19-65頁
- 33, 荒井礼「王漁洋の戦争批判詩—「蚕租行」を中心として」, 筑波大学『筑波中国文化論叢』28号, 2009年, 第41-69頁
- 34, 奥田魚銭「漢詩名作賞味(11)高青邱・王漁洋」, 大法輪閣『大法輪』78号, 2011年9月, 第162-165頁
- 35, 荒井礼「王漁洋の「神韻」考: 陳子龍の詩詞を中心に」, 筑波大学『筑波中国文化論叢』32号, 2013年10月, 第49-88頁
- 36, 荒井礼「王漁洋の「神韻」: 『花草蒙拾』に見える史達祖・李清照詞を中心に」, 中国文学学会『中国文化』71号, 2013年, 第83-95頁
- 37, 陳文佳「森春濤の王士禛受容について」, 和漢比較文学学会『和漢比較文学』53号, 2014年8月, 第1-20頁
- 38, 荒井礼「王漁洋の「南唐宮詞八首」について」, 中国文学学会『中国文化』72号, 2014年, 第14-26頁
- 39, 荒井礼「王漁洋研究」, 筑波大学博士論文, 2015年3月25日
- 40, 大平桂一「王漁洋の詩と詩論」, 大阪府立大学博士論文, 2015年9月17日
- 41, 藤井良雄「『過日集』における王漁洋(其の1)」, 九州中国学会『九州中国学会報』54巻, 2016年, 第105-120頁
- 42, 藤井良雄「『過日集』における王漁洋(其の2)」, 福岡教育大学『福岡教育大学国語科研究論集』58号, 2017年3月, 第19-29頁
- 43, 小塚由博「清代文人の琉球に関する記録: 王士禛『紀琉球入太学始末』及びその周辺」, 大東文化大学『東洋研究』202号, 2016年11月, 第37-66頁
- 44, 小塚由博「張潮と王士禛の交遊関係: 編集状況を手がかりに」, 大東文化大学『東洋研究』210号, 2018年12月, 第29-66頁

出典：国立国会図書館資料より作成。

表6 昭和後期以降清詩及び王漁洋研究文献：訳注

1. 齋藤聡・北澤実「帯経堂詩話注釈(1)」、『国士館大学漢学紀要』2002年第5号,第111-130頁
2. 荒井礼「帯経堂詩話注釈(2)」、『国士館大学漢学紀要』2003年,第6号,第85-93頁
3. 齋藤聡・荒井礼・安西孝行・大久保裕一朗・都築康子「帯経堂詩話注釈(3)」、『国士館大学漢学紀要』2004年第7号,第103-127頁
4. 荒井礼「帯経堂詩話注釈(4)」、『国士館大学漢学紀要』2005年第8号,第57-69頁
5. 荒井礼「帯経堂詩話注釈(5)」、『国士館大学漢学紀要』2006年第9号,第151-170頁
6. 荒井礼「帯経堂詩話注釈(6)」、『国士館大学漢学紀要』2007年第10号,第97-118頁
7. 齋藤聡・荒井礼「帯経堂詩話注釈(7)」、『国士館大学漢学紀要』2008年第11号,第113-127頁
8. 荒井礼「王漁洋『花草蒙拾』訳注(1)」,筑波大学『筑波中国文化論叢』第31号,2012年10月,第57-120頁
9. 荒井礼「王漁洋『花草蒙拾』訳注(2)」,筑波大学『筑波中国文化論叢』第32号,2013年10月,第155-180頁

出典：国立国会図書館資料より作成。

以上、江戸時代から現在に至るまで日本における清詩及び王漁洋研究について時系列的に整理、概括してきたが、多くの清詩人の中で王漁洋が特に受入られていたことがわかった。その理由として以下の三点を挙げることができる。

第一に、王漁洋は康熙期から政権より認められた「詩宗」である。『清史稿・王士禎伝』によれば、彼は文辞を以て皇帝に近侍する翰林院侍読に昇進し、部曹より詞臣となったが、これは清代最初の例である<sup>(22)</sup>。

第二に、王漁洋の詩作は康熙期から頻繁に総集に選ばれ、清詩の經典とされていた。例えば、陳允衡『国雅初集』、鄒漪『名家詩選』、吳之振『八家詩選』、魏憲『皇清百名家詩』、『詩持』、聶先『百名家詩抄』、鄧漢儀『詩觀』、孫鋹『皇清詩選』、徐崧『詩風初集』、席居中『昭代詩存』、陳維崧『篋衍集』、劉然『詩乘』、吳騫『名家詩選』、陶煊・張璨『国朝詩的』、陳以剛『国朝詩品』、彭廷梅『国朝詩選』、邵玘・屠德修『国朝四大家詩抄』、劉執玉『国朝六家詩抄』、沈德潛『清詩別裁集』などの清詩総集において王漁洋詩は多く収録され、当時から大いに重視されてきた。

第三に、王漁洋詩は清詩の中で特に早い時期から多く日本に入った。考察によると、王漁洋詩はその生前から日本に伝来し(元禄14年＝康熙40年に鄧漢儀『詩觀』が、享保11年＝雍正4年に王漁洋『漁洋山人精華録』が日本に伝来)、文化2年以前、王漁洋詩は清詩総集の伝来によって多く伝来してきたが、文化2年以降、王漁洋別集伝来の頻度が清詩総集のそれをはるかに上回り、毎年かつ多く日本に伝来していたという<sup>(23)</sup>。その結果、江戸末期において、日本における王漁洋詩は清詩の中でも特に量が多く、また日本の漢詩人の中で特に影響が大きいものとなったのである。

### 三. 日本における王漁洋研究の主な論点と成果

#### 1. 王漁洋の個人史について

王漁洋の個人史についての研究は主に高橋和巳『中国詩人選集二集 13 王士禎』付録の「王士禎年譜」と橋本循『漢詩大系 23 王漁洋』の冒頭における「王漁洋小伝」などがある。高橋和巳の「王士禎年譜」は王漁洋の出生から死去までの歴史を編年体の形で概括的に紹介するものであり、王漁洋本人の自撰年譜によりつつ、著名な文人及び友人たちの生卒、採録された詩の理解に役立つ時事を補ったものである。計14頁となる。橋本循の「王漁洋小伝」は、①揚州以前、②揚州時代とその後、③四川旅行とその後、④南海旅行とその後、⑤陝西・四川旅行とその後、⑥晩年との六つに分けて詳しく解説している。計45頁

にも及ぶたいへん詳細な内容となっている。また、以下のように自分なりに評価を行うものは随所見られる。

- ・彼の詩作に最も影響を与えたのは、長兄西樵（士禄）であった（第12頁）。
- ・秋柳詩によって漁洋の詩人としての名声は、一躍して高く、不動の評価は定まったのである（第16頁）。
- ・揚州に於ける生活は、一面は俗務繁忙であり、一面は風流文雅なものであった（第19頁）。呉梅村が「漁洋の揚州に在るや、昼は公事を了し、夜は詞人に接す」と言ったのは実録である（第25頁）。
- ・康熙四年、上都。詩壇の極盛時代であった（第26頁）。

## 2. 清詩の特徴及び王漁洋の清詩における地位について

佐藤一郎「王漁洋と清朝風」は、清詩の特徴及び王漁洋の清詩における地位について次のように評価している。

「清朝人の詩をすこし読んでみて気附くことは、その詩が洗練の極に達した珠玉のような表情を持っていることである。やや人工的な感じを伴う華麗で繊細な表情の底に秘められた寂寞、これは王士禎（漁洋）・沈德潜・袁枚らの主張がそれぞれ異なるにもかかわらず不思議に共通している。理論的には神韻・格調・性霊の旗幟を鮮明にし、対立している面が多いのに、大きく清朝という流れのなかで考えた場合、現実から一步退いたところで、ある種の空しさと寂しさを伴う華やかな詩風を展開して見せるのである。王士禎はじつに、いま述べた特徴をもっとも早く、しかも完全に実現した清朝第一の詩人である」。

「士大夫の文学における学問的素養は、基本的には拡大の方向にあるが、一方、清初以来専家の意識、あるいはある文学ジャンルに専念する傾向が顕著になってくる。王士禎はこのような時代の動きのなかで専門詩人として立ち、そのかなり豊かな学問的素養を背景に、象徴詩風の表現のなかに、詩の生きる道を見出したのである」。「異民族支配の言論統制のもとで、戴名世のように文字の獄の犠牲者にならないようにするためには、比喩的な発想が一番安全である。ことに自然の風物に寄せ、暗示するようにするならば、境遇を同じくする者の心には響きあうであろう」。

「王士禎は人生を、直接的な姿勢では詠じなかったが、哀切を極めた「悼亡詩二十六首」を残している。公的な面とかかわること少なき家庭内のことでは、真情を吐露していることを考えると、かれは繊細な感情の持主であったと思われる。かれはこの点でも、まったく清朝人であったといわなければならない」<sup>(24)</sup>。

ここでは、「神韻・格調・性霊」といった清代の三大詩説を並べて示しているものの、王漁洋は「清朝の第一の詩人である」との評価を行い、彼は清朝政府による言論統制という厳しい現実の中で「詩の生きる道を見出した」を称賛している。

近藤春男は、王漁洋が「新しい詩風を起こし」、「清朝詩の基礎を築いた」と評価し、その清初詩壇における地位について次のように指摘している。秋柳詩全体は流動するような音調が新しく、銭謙益、施閏章らに率いられて明代の詩風を批判していた清初の詩壇に歓迎された。その後、神韻説を提唱し、唐の司空図、宋の嚴羽らの詩論に源をもち、「言は

尽る有りて而も意は窮まり無き」興趣を尊び、詩禅の一致を唱え、清麗な描写の中に無限の情緒を漂わせ、淡泊清遠の境地に至るのを至極とした。そして、彼自身が自分の詩論をよく実践に移し、数多くの名句が知られるようにまさに「一代の正宗」としてその声望は天下を風靡した<sup>(25)</sup>。

### 3. 唐詩の伝播における王漁洋の貢献について

中田勇次郎「唐詩と王漁洋のことなど」は唐詩と王漁洋のことについて以下のように見ている。

「漢詩をよむ人は、まずそれを見ただけで、何かあるふしぎなうつくしさに打たれる。それは、一つには漢詩を構成する文字の造形的な魅力からくるものあろうし、またその口ずさむ声調からくるものもあろうし、あるいはまた、その詩のそなえている意趣からくるものもあるであろう。しかしそれは一つ一つその出自を分析して解くことのできるものではなくて、何か全体からうける一種の感銘が、そういうところを起こさせるのであらうとおもわれる。そしてそれは短い詩ほどその力は大きく強いようである。すなわち絶句の五言とか七言にはそういう感銘を受けることがもっと切実である。しかもそれが唐の絶句となると、そのうちにさらにも一つ何か別のふしぎな微妙なうつくしさがある。王維とか孟浩然とか韋応物などの絶句をよむと、何か言葉で説明することのできない一種のうつくしさを感ずるものである。それはいったいどういうわけなのであらうか。それをもっともよく私たちに説明してくれるのは清初第一の詩人として名高い王漁洋である。かれは唐の絶句を愛して唐賢三昧集という好著をあらわし、詩の議論において神韻説をたてた」<sup>(26)</sup>。

王漁洋が神韻説の観点から唐詩を編集し、唐の五言七言絶句に重点を置いたことについて評価し、また明言しなかったが、王漁洋の神韻説は王維、孟浩然、韋応物などの絶句に一種のつながりがあるとの認識を示している。

近藤春男も、王漁洋は唐詩の選集を作ることによって自分の神韻説表していると見ており、王漁洋は王維、孟浩然、高適らの叙景詩を多く採り、李白、杜甫の詩をとらないこと、詩の韻律を研究して「律詩定体」を書くこと、「古詩平仄論」で古詩にも平仄に一定の規則があるという独特の見解を発表したことを高く評価している<sup>(27)</sup>。

### 4. 王漁洋の神韻説について

王漁洋の最も大きな功績は「神韻説」という詩説を提唱し、それに基づいてたくさんの詩作を書いたのであり、日本における王漁洋研究もやはり王漁洋の「神韻説」に注目が集まることとなっている。王漁洋の神韻説に関するいくつかの優れた研究を次に紹介しておく。

(1) 橋本循『漢詩大系(23)王漁洋』(集英社1965年)

漁洋は、宋嚴羽の「滄浪詩話」と唐司空図の「詩品」の言に於いて、「特に心に理会するところがあつた。彼の神韻説は、これに本づくものである。彼は興趣とか佇興とか興会という語を好んで用いた。適確な意味は、どういうことであらうか。外界の事象に対して、



おのずからにして湧き興る情緒とでもいうべきであろう。詩はこれを吟詠したものでなくてはならぬ。ただ情緒というものは、いわゆる写実的方法で表現することはできぬ。象徴的に表現することになる。つまり神韻説とは、一種の象徴的表現の作風を主張したものと思われる」。

「文字が無ければ詩は作れないが、文字だけでは詩の味はない。文字によって象徴された情緒、またその情緒を味い得るような文字によって象徴すること。これが味外の味であり、またその味を醸すことにもなる」。

「すなわち風流韻味は文字にあるのではない。文字を通じて韻味を感じるようにしなければならない」。

「神韻の二字は、漁洋が学人のために拈出したものであるが、これより先に、明の薛蕙が詩を論じて「総て其（詩）の妙は神韻に在り」と言っている」。

「漁洋の神韻説は遠くその源は唐の王維に発しているものと思われる」<sup>(28)</sup>。

## (2) 品川理恵子「王漁洋の作詩における神韻への意識：蜀道集と雍益集を対比して」

「王漁洋は唐詩を踏襲し、更に彼独自の詩的美意識を余す所なく表現した詩を今に残している。本来「神韻」という言葉は、漁洋以前にも明の孔天允が謝靈運、孟浩然、韋応物らの詩を評するのに用いており、またその概念も、すべてが漁洋独自のものとは言えないが、しかし、それを本格的な詩論として確立し、自らも多く秀れた詩を残していることが、漁洋が神韻説の提唱者といわれる所以なのである。王漁洋の神韻説とその作についてその特色をまとめてみると、①心理状態の平静さを尊重し、②近視眼的な見方でなく、絵画的で且つ奥行きのある世界であり、③断定することなく、ある種の曖昧さ＝余韻を持ち、無限の響きを求め、④常に物象と不即不離であって、⑤淡泊さと清遠さを愛する、という姿勢があるということになる。王漁洋の詩について大きく三段階（青年期、壮年期、老年期）の変化を認めるが、その後年において自覚的に神韻説を唱えた漁洋は、実際の作風においては、すでに青年期において、それを体現している。むしろ、最も強く意識し、事実そういう作が一番多く、彼をして神韻説の提唱者といわしめた詩作の充実期が、その青年期にあった。その後は彼自身の人生が多分にその作風に影響を与えていたようである。その意味においては、漁洋の詩と人生も不可分のものであったと思う」<sup>(29)</sup>。

## (3) 岡田祥子「王漁洋の『唐賢三昧集』について」

『唐賢三昧集』は、王漁洋の神韻説を理解する最もよい手がかりとして、人々に読まれたものであろう。なぜなら王漁洋は、自ら提唱した神韻説を説明するのに、直接自分の言葉で明らかに定義を下すことはいっさいせず、嚴羽の論ずる「興趣」と、司空図の「味外の味」なる語句をしばしば用いることにより、古人或いは自作の詩篇を示して直接の説明に代えたからである。それ故読者は、王漁洋の取り上げた詩篇の趣を理解することによって、王漁洋の言わんとする神韻説の意を汲まなければならなかった。ただし、王漁洋は嚴羽、司空図の詩観を継承して神韻説を唱え、そして『唐賢三昧集』を編纂したのであるが、その際に彼が提示しようとした神韻は必ずしも嚴羽などの考えていたものとは少し異なっ



でいて、『百家詩選』の李杜排除の方がより自説に近いと感じたのではないだろうか。王漁洋は決して李白、杜甫の詩を否定するわけではないが、ただ李白、杜甫の豪放・華麗或いは雄渾・悲壯の詩篇にのみ心を向けている詩壇の風潮を黙認するわけにはいかなかったのである。これこそ『百家詩選』が李白、杜甫を取らなかったことを是とし、みずからの集にも二家の詩を収めず、主として王維、孟浩然らの詩篇を収めて、本来あるべき盛唐詩なのだということを示した理由だろう。『唐賢三昧集』は、康熙詩壇のある種の改革を意図して、編まれたものであると言えるかもしれない<sup>(30)</sup>。

この研究によって特にわかってきたのは、王漁洋の神韻説はその詩の創作に表れるだけでなく、その前人の詩作の編集においても大いに反映されているということである。『唐賢三昧集』は王漁洋が「神韻説」に基づいて選んだ彼の志趣の到達点であると言えよう。

#### (4) 荒井礼「王漁洋の「神韻」考：陳子龍の詩詞を中心に」

「王漁洋の提唱した神韻とは、詠じる対象をはっきりと描写するのではなく、簡潔であっさりとした表現を用いて、対象の特徴のみを取り出して描き、行間から内容が伝わってくるような作品のようである。また、王漁洋が、晩唐司空図の「味は酸鹹の外に在り」や、仏教的な価値観で詩を論じた南宋嚴羽の『滄浪詩話』を尊び、王維、孟浩然、韋応物、柳宗元といった山水詩人を好み、彼が編纂した盛唐詩のアンソロジー『唐賢三昧集』には、王維、孟浩然といった詩人が多く採られ、李白、杜甫は一首も採られていないなどの理由から、「神韻」には、山水描写を貴び、「遠」「淡」「夕陽」「雨」「煙」といった淡泊で曖昧な語彙を好む傾向があるとされてきた。しかし、『花草蒙拾』に次のような一条がある。「雲間数公論詩、持格律、崇神韻。然拘于方幅、泥于時代、不免為識者所少。其于詞、亦不欲涉南宋一筆。佳处在此、短处亦坐此」。「神韻」を崇んだという雲間派詩人陳子龍の詩、その一般に認識される特徴は、前述した「神韻」の特徴とは趣を異にしている。しかし、王漁洋は陳子龍らの詩には「神韻」があると認めている。ここに、「神韻」の解釈について、もう一度考える必要を感じるのである。そもそも、「神韻」とは、華麗で婉曲な女性的世界を詠じる詞を評するはずの語だったのではないか。それならば、「神韻」を崇んだという陳子龍が、その詩論と詞論で閨怨的表現に関心を抱き続けていたこととも辻褃が合う。王漁洋に称賛された陳子龍の詩には、閨怨的な語彙は目立っていなかったが、これは、詞的な「神韻」を詩の世界に転化して用いたためではないだろうか。なによりも、本来詞的な「神韻」という概念を詩論として用いたという意外性があったからこそ、王漁洋の「神韻」は一世を風靡するに至ったとも考えられよう。詩詞の違いによる「神韻」の差異、及び、その発展過程については、更に考察を要する問題であるが、「神韻」が、華麗且つ婉曲な閨怨的要素と関係が深いことは明らかである<sup>(31)</sup>。

王漁洋の詩作及び詩学理論において最も特徴的で影響の大きいのは神韻説というものであるが、神韻説とは何か、また王漁洋神韻説の源はどこにあり、それはどのように形成されたのか。

上述した日本における関連諸研究では、王漁洋の「神韻説」は司空図、嚴羽の詩観を継

承し、特に二人の「味外之味」（味外の味、つまり文字によって象徴された情緒、またその情緒を味い得るような文字によって象徴すること）、「不着一字、尽得風流」（一字を著けずして、尽く風流を得る）というのが王漁洋が主張する「神韻」であり、また王漁洋の神韻説は唐代の王維、孟浩然、韋応物などに発しているものとしている。

しかし、筆者によれば、司空図と嚴羽の言い方が抽象的で理解しにくく、王漁洋は「清」「遠」「自然」「沖淡」といったより具体的でわかりやすい言葉で「神韻」の本質について示したと考えられる。彼は「詩以達性、然須清遠為尚。（中略）総其妙在神韻矣」（詩は以て性を達す、然れども須らく清遠なるべし、これを総じて其妙神韻に在り）（王漁洋『池北偶談・神韻』）といい、特に「清」「遠」を重んじることを強調している。また、神韻説は「詩経」及び魏晉南北朝時代の詩から得るものが多かったと考えられる。王漁洋はその随筆集『池北偶談』の中で、自分の最初の学詩は「詩経」から始まり、それに強く影響されたと自ら回顧している。「詩経」以降、詩作に関して阮籍、陶淵明、謝靈運など魏晉南北朝時代の詩人の作品から、詩学理論に関して、南朝鍾嶸、唐朝司空図、宋朝嚴羽などから大いに影響を受けていることは、王漁洋自らの説明よりも、王漁洋詩作の分析よりもわかる。すなわち、王漁洋の神韻説は、「詩経」、陶淵明詩、唐代の山水田園詩及び司空図と嚴羽の詩論を含めた中国歴代の詩作及び詩学理論の影響を受けて形成されたものであると考えられる。

## 5. 王漁洋詩における「煙」の使用について

大平桂一「王漁洋詩論」の中で王漁洋詩における「煙」の使用について次のように分析している。

「王漁洋の詩を読んでいて、まず目につくのは「煙」という語の多さである。『漁洋山人精華録』1696首の中、223首に「煙」が使用されているとのことである。王漁洋の詩における「煙」の存在感は圧倒的であり、非常に重いモチーフとなっている。「煙」が出てくる詩を分類すると次のようになる。①即目の詩（眼前の景物や周囲の空間を詠じた詩）。②政治的隠喩を含みつつも即目の詩としても鑑賞に耐えるもの。③絵画に題した詩。王漁洋は「煙」で朦朧化された眼前の空間を、専ら色彩によって描写した。それらの色彩は互いに対比され、かつ「煙」が加わることによって、対比は繊細に巧緻になっている。王漁洋は『唐賢三昧集』の詩人、特に王維の空間描写の技法を継承しつつ、その技法を「煙」で朦朧化された空間にほどこすことによって、視覚とりわけもののフィルムを熟視する従来の空間描写の定型から切り離して純粹培養を試みたのであった。中国の古典詩は、全盛期とされる唐代と、別の可能性を探った宋代とですでに完結したものと普通には考えられている。明代以後は、この二つの朝代の詩風のいずれかを規範として詩を作る流派と、できるだけ自由奔放に詩を作ろうとする流派の交替の歴史である。例えば盛唐の詩、特に杜甫の詩を絶対的に規範とした李夢陽等の「前後七子」と、彼等を批判し平易自由な表現を目指した「公安派」、奇抜な着想を好んだ「竟陵派」の対立である。王漁洋はこの対立論争以後に生を享ける詩人としてきわめて慎重な態度をとらざるを得なかったのである。そこで彼が選び得た唯一つの道は、古典詩の枠を破ることなく、しかも過去の作品に似ない詩を書くというものだったのである。目で物を熟視・凝視して詩を書いた瞬間に誰かの作品

に類似してしまうことを王漁洋はよく知っていた」。

「用典の妙を称えられる出世作「秋柳四首」でもなく、揚州時代に夥しくものにした明王朝を弔う連作でもなく、四川旅行中の杜甫を意識した諸作でもなく、「答鍾聖與送芍薬」詩こそが王漁洋の詩業の頂点である。かてて加えて穏やかで破綻のない贈答詩にこの詩がなっている点に彼の力量のすごさを見ることができるのである」<sup>(32)</sup>。

これまで王漁洋詩における「雨」の使用に関する研究が多くあったが、王漁洋詩における「煙」の使用に関する研究が少なく、ユニークな研究だと言える。

## 6. 王漁洋の女性題材詩について

荒井礼「王漁洋の「南唐宮詞八首」について」は王漁洋の女性題材詩についてその「南唐宮詞八首」を取り上げながら次のように述べている。

「王漁洋の女性を題材にして詠じた詩には、往々にして描写対象となった女性を称揚したものがあある。「南唐宮詞八首」は、王漁洋が意識的に女性を称揚しようとしたことが窺える。その特徴は次のとおりである。①女性を称揚するとき、従来の「宮詞」とは異なり、詠じられている女性が特定できるようになっている。これは、詠じられた女性を特定することで、女性に存在感を持たせ、実際に優れた女性がこの世にいたことを強調する狙いがあったのだと考える。②南唐の皇帝、特に元宗と後主の二人は文学的に優れた才能を発揮していた。しかし、彼らの文学的才能を称揚した詩がなく、王朝の繁栄ぶりが強調して描かれている。これは、繁栄した王朝だからこそ、才能豊かな女性たちが現れてくるという認識があったのだと考える。つまり、南唐の皇帝たちは優れた女性を輩出し支える存在として描かれているのである。③「南唐宮詞八首」の構成。其一・二は皇帝たちのことをが描写され、其三・四・五・六は才能豊かな女性たちを描写し、其七・八は再び皇帝のことが描写されている。女性が詠じられている詩を、皇帝が詠じられている詩がさしはさむ構成をとっていることに気付く。つまり、はじめに王朝が繁栄していくさまを描き、次に繁栄した王朝の中で自由に才能を昇華させていく女性を描き、最後に女性が才能を維持できるように、王朝の繁栄が保たれていたことを描いている。これは、女性の才能が際立つように、構成が工夫されているのである」<sup>(33)</sup>。

王漁洋の女性題材詩に関する研究は中国国内でもそれほど多くないなか、この研究は異なった視点に立った新しい研究として注目に値する。これによって、王漁洋詩は内容の範囲がとても広いことが知られる。

## 7. 王漁洋の社会批判詩について

荒井礼は王漁洋の社会批判詩に直目し、研究の成果を次の二つの論文にまとめている。一つは、「王漁洋の「詠史小楽府三十首」について」であり、次のように分析している。

「王漁洋の詩は、雨や霧を詩中に詠いこみ、風景を曖昧に描写することが特徴とされ、とりわけ山水詩を以って評価される。しかし、王漁洋の詩には、山水詩のほかにも優れた詩

がある。例えば、王漁洋の「詠史小楽府」は、傑出した人物の称揚と社会批判とを存分に含んだ 30 首を超える連作であり、実に注目するに足る詩である。そもそも「小楽府」とは、歴史故事に託して、世間を風刺するという目的で制作されるものであった。王漁洋は、世間に対して詩を以って風刺し、時弊を正していくという姿勢を、自らの「詠史小楽府」において貫いていたのである。その題材として『三国志』を選んだのは、当時民間で流行していた小説『三国志演義』を利用しようとしたのではないだろうか。勧善懲悪的な、悪の帝国魏と正義の王国蜀という構図は、当時においては、征服王朝清朝と正統な王朝明という構図に、容易に置き換えることができたであろう。実際に、「詠史小楽府」を読めば、自ずと征服王朝たる魏への反感は募る。それはまた、無意識に自分たちにとって身近な存在、即ち清への反感、憤りを読者に湧き起こさせるものであったはずである。勧善懲悪的な『三国志演義』が、民間で流行していたのも、王漁洋にとっては都合の良いことであっただろう。一部の知識人だけでなく、この「詠史小楽府」は、広く民間にも示そうという狙いが、漁洋にはあったはずである。それは、銭謙益が清に降伏したことを弁護するような詩を制作したことや、「詠史小楽府」がもともと単行本として刊行されていたことから察することができる。明末清初において、他のどの時代でもなく、三国時代を題材として詠った所に、王漁洋の工夫と、明末清初を生きた詩人としての思いが込められている<sup>(34)</sup>。

もう一つは、「王漁洋の戦争批判詩：「蚕租行」を中心として」で、次のように分析している。

「従来、王漁洋の詩はとりわけ山水詩に優れるとされ、自然の景色を描写した詩が注目されてきた。しかし、山水詩とはかけ離れた印象を与える戦争を詠じた詩にも注目に値するものがある。それは、彼が明末清初の動乱期に生を受け、少年期に戦争を肌で感じた人物であったことに関係している。「蚕租行」は漁洋初期の作品であり、作詩法において注目すべき特徴がある。さらに、制作動機が漁洋自身によって明記されており、彼が戦争批判詩において何に重きを置いていたかを知る手掛ともなるように思えるのである。「蚕租行」全篇五言で、一解は四句でまとめられており、一解ごとに場面が変わる。一解ごとに舞台や話題、さらに登場人物までもが入れ替わりするさまは、まるで戯曲を見ているようでもあり、全四十句の詩であるにもかかわらず、その長さを感じさせない。この場面転換によって戯曲を思わせる作詩法は、漁洋詩の一特徴として新たに注目することができよう。「蚕租行」は、税金のとりたてが兵糧を賄うために厳しくなり、自殺に追い込まれた平民の家族、という戦争によって引き起こされた悲劇を描いている。その詩には実際の戦争の描写がない。それは、戦争による直接的な被害に遭わずとも、その被害は社会的立場の弱い平民たちに容赦なく降りかかることを述べるためだった。なお、「蚕租行」と杜甫の「兵車行」は、①民衆の立場にたった戦争批判、②俗語の使用、③税のとりたての厳しさを訴える場面など、類似点が多くあり、王漁洋の戦争批判詩は杜甫の影響を受けていると言える<sup>(35)</sup>。

神韻説と呼ばれる王漁洋の詩学特色という観点から、従来は王漁洋詩について主にその山水詩が取り上げられているが、社会批判詩という現実問題を題材とした王漁洋詩の存在



を指摘し、その事例を挙げて分析することは大きな意義があると思われる。

## 8. 最近の研究成果について

近年、一部早期の清詩及び王漁洋研究の代表的な成果が続々と改訂、再版されている。例えば田岡嶺雲著、大日本図書1900年版『中国文学大綱卷十三 王漁洋』は、2018年に法政大学出版局から『田岡嶺雲全集第六巻 王漁洋評伝』の形で改訂、再版され、橋本循著集英社1965年版『漢詩大系23 王漁洋』は、2020年に法蔵館から『橋本循著作集第三巻 王漁洋』として改訂、再版された。それと同時に、荒井礼、齋藤聡、水津有理、小塚由博をはじめとする比較的若い学者が頭角を現し、研究成果が多く、視点が独特で、考証が慎重で詳しく、日本における清詩研究レベルの更なる向上に寄与できると思われる。

荒井礼の『王漁洋研究』（筑波大学博士論文、2015年3月）は、神韻説を中心に王漁洋の詩作と詩論について研究し、若干の新しい観点を提出している。例えば、王漁洋の「神韻」という詩風について、従来の研究は、「神韻」の代表作として知られる「秋柳四首」が王漁洋24歳の時の作であるため、「神韻」を若年から晩年まで一貫して維持された特色と見なしてしまい、詩人の成長という観点到に欠けていたと指摘し、「神韻」詩風は、王漁洋が詩人として成長してゆく過程において、徐々に形成されたものであると主張している。また、彼は、これまでは、「神韻」を詩から受ける印象として語ることが多かったのに対して、「神韻」を表現技巧の問題と見なし、詩・詞の構成や措辞に対する解釈をもとに、様々な新しい見方を示している。

大平桂一の『王漁洋の詩と詩論』（大阪府立大学博士論文、2015年9月）も参考になる。彼は、過去に王漁洋関連の研究はたくさんあったものの、まだ詳しいとは思わないと言って、王漁洋詩の細部について丁寧に考察し、若干の新しい発見があったとしている。確かに彼の研究は、従来あまり重視してこなかった細部までに着目し、関連事項の考証や資料の補足に大いに力を入れ、新しい知見を多数示している。

漢字使用国と漢学研究大国として、日本は清詩と王漁洋の文献資料の収集と整理に比較的成功しており、特に近年の文献資料の電子化とネット検索機能の強化は、文献資料の検索と利用を非常に便利にし、研究成果の相互交流と共有も非常にタイムリーで広がっている。研究条件と環境の改善は日本漢学研究の発展と繁栄に対して巨大な推進作用があると思われる。

## 四. おわりに

本稿では、王漁洋研究を中心に、日本における清詩研究の歴史と現状について考察を行ってみた。結論と展望は以下にまとめておく。

第一に、日本における清詩研究の歴史が長く、蓄積が豊富である。江戸時代には、清詩は同時代の文学として日本に伝わり、広く伝えられ、日本の詩壇に深い影響を与えた。今日に至るまで、日本における清詩研究は長く続けられており、日まにに繁栄し、日本における漢学研究の重要な構成部分となっている。

第二に、洋学が積極的に導入され、「脱亜入欧」を目標として西洋化が大いに進んでいた明治時代においても、日本の漢詩人は、日本文化における「世界文学としての中国古典」の地位を守ることを使命として、清詩の研究と宣伝に力を入れ、「清詩流行」と「漢学」



の隆盛をもたらし、日本における清詩研究の系譜を引継ぎ、後世に導いた。

第三に、王漁洋研究は日本における清詩研究の焦点である。神韻説を中心にしながら、王漁洋研究は広さと深さの両方においてかなり高いレベルに達し、田岡嶺雲『王漁洋』、鈴木虎雄『支那詩論史』、青木正児『清代文学評論史』、高橋和巳『王士禛』、橋本循『王漁洋』、松下忠『明清三詩説』をはじめとする重大な研究成果が多数現れ、日本における清詩と王漁洋研究の基盤を固めた。

第四に、近年、文献資料の検索と利用がますます便利になり、日本における清詩と王漁洋研究の成果が増加の勢いを見せている。早期の著名な研究成果が続々と改訂、再版されると同時に、多くの新進気鋭の学者が頭角を現し、研究成果を出すスピードが速いだけでなく、視点が斬新で考証も詳しくて確実であり、日本における清詩と王漁洋研究の更なる向上に希望をもたらしている。これは、一つの側面から日本における漢学研究の現状と未来を示唆するものとして見てよかろう。

高橋和巳は王漁洋の文学について次のように評価している。「激しい燃焼の文学であるよりも、静謐と平和の文学であり、主張の文学であるよりも、吟味と観賞の態度の産物であるといえる。その措辞と結構には、常に一種の「心のやさしさ」がただよい、それゆえに彼の作品は、深刻な、この人生の問いと意義を求める読者には、少しく失望を、そして安息と慰めを求める精神には、無限のうるおいをあたえるであろう。やすらぎの文学であって、戦いの文学ではない。そして、文学の幅には、その多様さの一翼に、こうした作者と作品を含んでいてよく、人はときに、こうした安らぎのうちに、平和・幸福・友誼・慈しみ等等、ともすれば苛酷な現実忘れがちな感情を、主張によってではなく、吟味によって体得することもまたよいことなのである。平和さの美的顕現、それは、文学のあるべき本来の姿の一つであるだろうから」<sup>(36)</sup>。筆者はこの評価に大いに同感し、王漁洋研究は実に大きな現実的意義があると思い、その更なる進展を期待し続けたい。

## 注記

- (1) 趙爾巽ほか編清朝一代の紀伝体歴史書『清史稿』では王漁洋を「一代正宗」と称している。以来、王漁洋が「一代正宗」「一代詩壇正宗」「一代詩宗」などと称されるようになった。なお、近代学者胡懷琛著『中国八大詩人』（商務印書館 1925 年）では王漁洋を屈原、陶淵明、李白、杜甫、白居易、蘇軾、陸游と並んで中国を代表する八大詩人の一人としていることがよく知られている。
- (2) 『懷風藻』は近江朝から奈良朝までの 64 人の作者による 120 首の詩を収め、作風は中国大陆、ことに浮華な六朝詩の影響が大きい、初唐の影響も見え始めていると言われる。撰者不明の序文によれば、天平勝宝 3 年(751)頃に完成されたと考えられる。
- (3) 『万葉集』は全 20 巻からなり、約 4500 首の和歌が収められ、7 世紀後半から 8 世紀後半にかけて編纂された日本に現存する最古の和歌集である。
- (4) 「五山文学」とは南北朝時代から室町時代にかけて、鎌倉五山と京都五山を中心とした禅僧たちによって盛んに行なわれた文学である。漢文学を主体としており、漢詩、漢文、日記、語録などにわたる。中国の宋元文化の影響のもとに栄えたと見られる。
- (5) 松浦友久編著『漢詩の事典』大修館書店 1999 年第 4 頁。

- (6) 松浦友久編著『漢詩の事典』大修館書店1999年第2～3頁。
- (7) 和刻本漢詩は日本で木版本として出版された漢詩であり、単行本（例えば王漁洋『漁洋山人精華録』『帶經堂全集』など）、総集（例えば『清詩選』『清詩別裁集』『清百家絶句』など）、別集（例えば『王漁洋詩抄』『王阮亭詩選』など）がある。
- (8) 『漁洋山人精華録』は王漁洋が自作の3000余の詩作の中から1600余を選んで作った詩集で、康熙39年（1700）に刊行された。後に多くの注解本が出たが、恵棟『漁洋山人精華録訓纂』と金榮『漁洋山人精華録箋注』は最も知られている。なお、大庭脩『江戸時代における唐船持渡書の研究』によれば、『漁洋山人精華録』は享保11年（1726）に日本に伝来されたという。
- (9) 揖斐高「明治漢詩の出発―森春濤試論」『江戸文学』通号21特集「明治十年代の江戸」1992年12月。
- (10) 木下彪『明治詩話』東京文中堂1943年、紀田順一郎編『近代世相風俗誌集（8）』クレス出版2006年第356頁。
- (11) 水津有理「明治期における清詩受容について―同時代の文学として」『お茶の水女子大学教育研究成果集』2007年第286～289頁。
- (12) 神田喜一郎「日本における清詩の流行」『神田喜一郎全集』第八巻同朋舎出版1987年。
- (13) 水津有理「明治期における清詩受容について―同時代の文学として」『お茶の水女子大学教育研究成果集』2007年3月第287頁。
- (14) 木下彪『明治詩話』東京文中堂1943年、紀田順一郎編『近代世相風俗誌集（8）』クレス出版2006年第166～167頁。
- (15) 大江敬香「明治詩壇評論」神田喜一郎編『明治漢詩文集』明治文学全集62筑摩書房1983年。
- (16) 田岡嶺雲から書かれた五つの評伝及び収録巻は次の通りである。①《支那文学大綱巻一 庄子》（1897年8月）、②《支那文学大綱巻四 蘇東坡》（1897年11月）、③《支那文学大綱巻八 屈原》（1899年6月）、④《支那文学大綱巻十 高青邱》（1899年11月）、⑤《支那文学大綱巻十三 王漁洋》（1900年10月）
- (17) 田岡嶺雲の王漁洋研究について張兵「田岡嶺雲の王漁洋研究」（王漁洋文化研究保護中心『王漁洋文化』2021年第2期、第24～27頁）を参照されたい。
- (18) 鈴木虎雄『支那詩論史』は次の中国語翻訳がある。許総訳『中国詩論史』広西人民出版社1989年。
- (19) 青木正児『清代文学評論史』は次の中国語翻訳がある。楊鉄英訳『清代文学評論史』中国社会科学出版社1988年。
- (20) 高橋和巳の王漁洋研究について張兵「高橋和巳注『王士禎』述評」（王漁洋文化研究保護中心『王漁洋文化』2021年第3期、第19～22頁）を参照されたい。
- (21) 橋本循の王漁洋研究について張兵「橋本循的王漁洋研究」（王漁洋文化研究保護中心『王漁洋文化』2020年第3期、第16～20頁）を参照されたい。
- (22) 『清史稿・王士禎伝』によると、「上留意文学、嘗從容問大学士李蔚：今世博学善詩文者孰最？蔚以士禎対。復問馮溥、陳廷敬、張英、皆如蔚言。召士禎入对懋勤殿、賦詩称旨。改翰林院侍講、遷侍読、入直南書房。漢臣自部曹改詞臣、自士禎始」という。

- (23) 賀琴「日本江戸、明治時期的詩歌選本与王士禎接受」『文献』2024年5月号第125頁。
- (24) 佐藤一郎「王漁洋と清朝風」橋本循『漢詩大系 23 王漁洋』集英社1965年第2頁。
- (25) 近藤春男「王士禎」『新潮世界文学辞典』新潮社1990年第185～186頁。
- (26) 中田勇次郎「唐詩と王漁洋のことなど」橋本循『漢詩大系 23 王漁洋』集英社1965年第2～3頁。
- (27) 近藤春男「王士禎」『新潮世界文学辞典』新潮社1990年第186頁。
- (28) 橋本循『漢詩大系 23 王漁洋』集英社1965年第59頁。
- (29) 品川理恵子「王漁洋の作詩における神韻への意識：蜀道集と雍益集を対比して」お茶の水女子大学『中国文学会報』Vol.2、1983年4月、第31～47頁。
- (30) 岡田祥子「王漁洋の『唐賢三昧集』について」お茶の水女子大学『中国文学会報』Vol.6、1987年4月、第137～145頁。
- (31) 荒井礼「王漁洋の「神韻」考：陳子龍の詩詞を中心に」筑波大学『筑波中国文化論叢』第32号、2013年10月、第49～88頁。
- (32) 大平桂一「王漁洋詩論」『大阪女子大学人文学科日本語日本文学専攻紀要』第39号、1988年3月、第63～79頁。
- (33) 荒井礼「王漁洋の「南唐宮詞八首」について」日本中国学会『中国文化』72号、2014年、第14～26頁。
- (34) 荒井礼「王漁洋の「詠史小楽府三十首」について」筑波大学『筑波中国文化論叢』第27号、2008年、第19～65頁。
- (35) 荒井礼「王漁洋の戦争批判詩：「蚕租行」を中心として」筑波大学『筑波中国文化論叢』第28号、2009年、第41～69頁。
- (36) 高橋和巳『王士禎』岩波書店1962年第16～17頁。

## 参考文献

- 青木正児『清代文学評論史』岩波書店1950年  
高橋和巳『中国詩人選集二集 13 王士禎』岩波書店1962年  
佐藤一郎「王漁洋と清朝風」『漢詩大系 23 王漁洋』集英社1965年  
中田勇次郎「唐詩と王漁洋のことなど」『漢詩大系 23 王漁洋』集英社1965年  
大庭脩『江戸時代における唐船持渡書の研究』関西大学東西学術研究所1967年  
松下忠『明・清の三詩説』明治書院1978年  
大江敬香「明治詩壇評論」神田喜一郎編『明治漢詩文集』明治文学全集62 筑摩書房1983年  
長澤規矩也編『和刻本漢詩集成総集編（8）』汲古書院1982年  
品川理恵子「王漁洋の作詩における神韻への意識：蜀道集と雍益集を対比して」お茶の水女子大学『中国文学会報』1983年4月  
岡田祥子「王漁洋の『唐賢三昧集』について」お茶の水女子大学『中国文学会報』1987年4月  
長澤規矩也編『和刻本漢詩集成（20）』汲古書院1987年  
神田喜一郎「日本における清詩の流行」『神田喜一郎全集』第八巻 同朋舎出版1987年

- 近藤春男「王士禎」『新潮世界文学辞典』新潮社 1990 年
- 揖斐高「明治漢詩の出発—森春濤試論」『江戸文学』通号 21 特集明治十年代の江戸 1992 年 12 月
- 松浦友久編著『漢詩の事典』大修館書店 1999 年
- 木下彪『明治詩話』紀田順一郎編『近代世相風俗誌集 (8)』クレス出版 2006 年
- 水津有理「明治期における清詩受容について—同時代の文学として」『お茶の水女子大学教育研究成果集』2007 年
- 荒井礼『王漁洋研究』筑波大学博士論文 2015 年 3 月
- 大平桂一『王漁洋の詩と詩論』大阪府立大学博士論文 2015 年 9 月
- 田岡嶺雲著西田勝編『田岡嶺雲全集第六巻』法政大学出版局 2018 年
- 橋本循著橋本循記念会編『橋本循著作集第三巻 王漁洋』法藏館 2020 年
- 張兵「橋本循的王漁洋研究」王漁洋文化研究保護中心『王漁洋文化』2020 年第 3 期
- 張兵「田岡嶺雲的王漁洋研究」王漁洋文化研究保護中心『王漁洋文化』2021 年第 2 期
- 張兵「高橋和巳注『王士禎』述評」王漁洋文化研究保護中心『王漁洋文化』2021 年第 3 期

Received : June, 24, 2024

Peer-reviewed : October, 22, 2024

Accepted : October, 30, 2024